



としょかんだより 8月号



東峰学園（小学部）梶原弥生

暑い暑い夏休みでしたが、楽しい思い出はできましたか。心に残る本との出会いはありましたか。図書館には、新しい本がたくさん届きました。ぜひ図書館に来て、2学期も本の世界を楽しんでほしいと思います。

新しい本が届きました

「ちいさなハチドリがちいさないってき」（ウノサワ ケイスケ）

大きなカミナリが落ちて、動物たちの住む大切な森が大きな火事になりました。何が飛んでいます。小さなハチドリが、小さなクチバシで水を一滴、一滴運んで、火事を消そうとしていたのです。



「がっこうにまにあわない」（ザ・キャビンカンパニー）

いそげ！いそげ！8時までに絶対に学校に行かなくちゃ！7時47分、玄関を飛び出して走りだしました。でも水たまりには人食いワニがいそがし・・・。



「一年一組 せんせいあのね」（鹿島和夫/選）

小学校の先生だった鹿島和夫さんは、1年生との間で交換ノート「あのね帳」を始めました。「にんげんはなんのためにいきているんですか ぼくはたっぴりあそんでたのしむためだとおもいます」など子どもたちのまっすぐな言葉が書かれています。



大ピンチずかん（鈴木のりたけ）

のもうと思っていた牛乳がこぼれた。ガムをのんでしまった。テープのはしがみつからない。ゲームの充電ができていない・・・。ピンチは何の前ぶれもなくやってきます。ピンチに出あうのをおそれるのではなく、どんなピンチがあるのかを知っておくと、どんなピンチもこわくないのです。



「えんぴつはだまって」（あんずゆき）

4年生のエリカは学校のろうかで、えんぴつを拾いました。夜、へんな声がかして自覚めると、見たこともない生きものがいました。えんぴつは、長い年月をへた道具にやどる「つくも神」だといいます。学校のテストでえんぴつが勝手に動き出し、エリカは満点を取ることが出来ました。



「はな とりかえっこ」(角野栄子)

アラさんのくしゃみがとまりません。「このはな、どこかに捨てちゃおうかしら」。そこへぶたさんがやってきて、「わたしのはなと、とりかえっこしません?」といました。そこで……。



「そんなうそだ!」(ジーン・メリル)

「イヌのごうかな服をうばいとってやろう!」さるとブタとキツネは、ほらばなしの勝負でイヌをだまそうとするのですが……。

「へそまがりの魔女」(安東みきえ)

暗い森に、年老いた魔女が住んでいました。人ざらいでへそまがりの魔女のもとに、ひとりの少女が訪ねてきました。帰るところがない少女は魔女と暮らし始め、魔女は、少女にいろいろなことを教えました。



「だれもみえない教室で」(工藤純子)

小6のクラスで起きた、ランドセルに金魚のエサが入られるという事件。被害を受けた子も、エサを入れた子たちも、いじめが起きた空気を感じつつ声をあげられなかったクラスメートも、そして、過去に加害者としていじめに加担した担任の先生も「いじめ」という現実に向き合っていきます。

「海をわたる動物園」(いちかわけいこ)

1955年、大学生のシュンは、アフリカから日本へ帰る途中、動物たちを運ぶ船に偶然乗り合わせました。戦争で動物がいなくなった日本の動物園を再開するために船で動物たちを運んでいたのです。飼育員が急病になり、シュンは、動物たちの世話を手伝えることになるのですが。



「雷のあとに」(中山聖子)

主人公の睦子は、小学5年生。転校生の出現で友達関係にゆれていきます。成績の良い兄と比べられたり、母親に叱られたり、睦子を包み込んでくれていたハルおじさんとの死による別れが訪れたり、家族関係にも気持ちが沈んでいます。そんなある日、雷による停電の中、ひとりで恐怖にふるえる睦子のもとに家族がかけつけてきます。

